

タイトル	本学の教養教育を考える : 教養部を振り返って
著者	小島, 康次; KOJIMA, Yasuji; 本城, 誠二; HONJO, Seiji; 亀井, 伸照; KAMEI, Nobuaki; 岡崎, 敦男; OKAZAKI, Atsuo; 大谷, 通順; OTANI, Michiyori; 山田, 誠治; YAMADA, Seiji
引用	北海学園大学学園論集(175): 1-29
発行日	2018-03-25

本学の教養教育を考える

—— 教養部を振り返って ——

小 島 康 次
(経営学部)

本 城 誠 二
(人文学部)

亀 井 伸 照
(法学部)

岡 崎 敦 男
(工学部)

大 谷 通 順
(人文学部)

山 田 誠 治
(経済学部)



【対談の目的】

山田 では、教養部を振り返って本学の教養教育を考える、というテーマで対談をはじめたいと思います。

この企画は、小島先生と本城先生が今年度で退職されることを機に、最近何かと話題になっている教養教育について、かつて教養部に所属していた先生方のご協力いただき、当

時の本学の教養教育について語っていただくことが目的です。

実際、そもそも教養部の記録が余りないとか、教養部自体どんなことをやっていたのか、そのことについての記録があまりなく、また、当時、リベラルアーツとか、ちょうど大学設置基準の大綱化のもとで、本学部の教養部を廃止するという改組転換の際にいろい

ろ検討されていたので、その資料を探し出し、当時の議論や取り組みなどについて残しておくのは意味があるだろうと考え、この対談に至りました¹。

また、昨年、東北・北海道地区高等・共通教育研究会でも、全体会の基調講演が「教養教育の危機—米国・欧州・日本」というテーマで、要は日本で政策的に教養部が廃止された結果、教養教育を考える場がどんどんなくなっており、いろんな歪が生じている、との提起がされた。そういう意味でも教養教育というか、教養部が存立している時代に取り組まれたいろいろな課題や実情について、当時の先生たちの考え方や経験をいろいろ聞き残し、今後に生かすことも含めて考えようということでした。

主な論点は三つぐらい。教養部がどのような教育を追求したのか、教養教育という意味でもあるし、初年度教育、今言われるような入学時にどのような転換教育をするのかという点。当時、この課題は学部の方にも振られ、教養部を解散したら1年から入学した学生を学部できちんと教育できるのか、と突きつけられ、いろいろ検討したように記憶しています。2番目は専門を探求してきた研究者がどのように学生の教養教育をするのか、そして3番目は、では望ましい教養教育とはどのようなものか、の三つです。

私も今覚えているは、小島先生が覚えていらっしゃるかどうかかわからないですけども、学部を超えて大学教育を考えるような有志の研究交流会が開かれ、丸山先生とか小島

先生とか入っていて、何年だったのかな。

小島 私が呼びかけたのです。

山田 ああ、そうですか。あのときは、専門教育、専門の研究者として教えることと、実際の学生を対象にして、特に入学したばかりの学生にどのように何をどう教えるのか、というギャップを教員の立場から見てどう考えるか、たしか先生がそんなテーマを提起されていたと思います。専門でやっていることをそのまま学生に教えたって、やっぱりだめだな、というあたりで私も悩んでいるときにそんな集まりがあり、今でも教員に共通の悩みでもあるので……。もう30年ぐらい前だから、余り鮮明に覚えておられないかもしれませんが……。

小島 やったということだけは覚えているのだけれども。やったという記憶あるよね。何やったのか、ほぼ覚えていない。

岡崎 教養教育についていえば、教養部の方針というのはなかったわね。でも、それぞれの分野ごとに系列というのがあって、そこでは議論していたけれども、例えば語学とか自然科学系列とか、でも社会科学系列の人たちは会合はなかったようですが。というように系列ごとに異なる実情でしたから、相当個人に任されていました。

だから、もう30年前でも今も、課題はその個々の科目をどのように有機的につなげていくかということがあり、結局それは当時最後まで実現しなかったという印象がありますね。

¹ 「大学設置基準の大綱化」とは、教育研究の多様化を図るため、大学の設置基準の規制を緩和する1991年から推進された文部科学省の大学政策。

【改組転換前の教養部】

本城 でも結局、今言ったようなことがその改組のときにやっぱりうまくいかなくて、僕ちょうど96年ぐらいに在外研修に行っていたのですよね。その前から検討が行われていたのだけれども、帰ってきたらもう教養改組というか解体が決まっていたので、今、岡崎さんの話につなげると、教養部としての全体の方針というのが余りなくて、個々にはあったけれども、それが大学設置基準以降の改組転換を検討するときにもやっぱりネックになっていたのかなという気はしますね。

山田 組織的にそういうことを検討するのは、やっぱり弱かったという実状が確かにありましたね。

本城 あともう一つ言わせてもらえば、学部は3年、4年の専門教育では足りないはずと思っていたので、機会があれば早目というふうに思っていたのと、その両方ですね。教養部の組織的なカリキュラムとか方針の検討がちょっと弱かったのと、学部は専門教育を2年じゃなくて3年、4年やりたかったっていうのと、その両方が大学設置基準大綱化をきっかけに出してきたのかなという気がします。

岡崎 あと、最初の2年間は、例えば1部と2部の間の移行、あるいは転学部なんていうのも全部教養部が審査していたので、それは学部からは苦情が出たわね、自分たちの学部の学生が教養部に審査されるのはおかしいと。

本城 なるほどね。だから自分たちの学部の学生が2年間は人質にとられているみたいな、それに対する不満はずっと、これ一番大

きいのかなという気はしますね。

小島 身内もそうですよね。教養部が教養部長が要は入試委員長でしたからね。私、最後の事務局長やって、来たばかりなのに事務局長って、今の入試部長の半分ぐらいの仕事はしましたよね。泊まり込んでいましたね、あのころは。

【教養部改革の「幻」のプラン】

山田 資料1は、教養部で検討されていた教養教育のカリキュラムプラン、当時教養部を解散して各学部に分属した形になるのか、それとも教養部という形の中身を変えて一般教育をやるのかとか、文科省とか政策ではそういう路線がどうも幾つかあったみたいですけども、教養部のほうではこういうことも考えて、教養課程検討委員会で報告されたのが、資料1のカリキュラムプランです。

これが割と大学入門とか学問基礎論とか、フレッシュマンズセミナーなどいろいろ新しい試みが導入されており、今の初年時教育とつながるものが、当時教養部でも検討もされていたんだと。

結局日の目は見なかったのですが、学問入門とか、分野的にもいろいろテーマ別のものがあり、そして科目名称も変え、新しい教養教育を追及しようとしていた、ということでしょうね。

本城 これ検討の最後のほうですよ、95年。最後のほうというか、97年で決めるから……。

岡崎 全く覚えていないな。

山田 ぱっぱと少人数でつくったのかな。

本城 でも、議論もやっていましたよね。

資料1-①

教養部カリキュラムプラン 95年2月
「教育課程検討委員会」の報告

I. 趣旨

A. 先の報告にある考え方を基本的に継承している

1. 大学教育の目標と設置基準の大綱化の捉え方
2. 専門教育科目と共通教育科目との構成
3. 単位数の配分：専門教育科目 88～共通教育科目 36～

II. 「大学入門」としての諸科目

A. 1年前期

B. Freshman's Seminar 2単位

1. 大学生としての基本的な能力
2. 個別授業のなかでおこなわれてきたことを、集中的・効果的におこなう

C. Computer Literacy 2単位

1. コンピューター操作の基本的技術

III. 「学問基礎論Ⅰ～Ⅲ」各2単位

A. 諸学問の基礎理論となるべき部分

1. 1年前期と3年後期 or 4年前期に、2種類を開講する

IV. 「学問入門」各2単位

A. 各学問分野の入門講義

V. テーマ科目群

A. 既存の「系列」を組み替える

1. 1年次後期から。当該テーマの多面的な講説

2. 各テーマに「総合講義」を設ける

3. ゼミナール

B. 各テーマ：「現代」と地域性

1. 現代の文化状況
2. 言語コミュニケーション
3. 地球科学と環境
4. ライフサイクルと発達
5. 現代世界と北方地域

VI. 外国語科目

A. 各国語からの選択必修

1. 選択条件に、学部・学科による差異

2. 新しいカリキュラム

B. 英語

1. ESL (English for Second Language) の教育方法をベースとする
2. Skill 別のクラスに分け、資格取得を目標とするクラスも設ける
3. 「言語文化演習」
4. 開講年次は、暫定的なもの。学生は年次にかかわらず参加できる

C. その他の外国語

1. 履修の枠組み
2. 各国語によって、内容が異なる

資料1-②

カリキュラム・プラン／共通科目・テーマ科目

学問基礎論	
学問基礎論Ⅰ	認識の哲学Ⅰ,Ⅱ
学問基礎論Ⅱ	現代思想の視点Ⅰ,Ⅱ
学問基礎論Ⅲ	数理の描く世界Ⅰ,Ⅱ

学問入門	
学問入門Ⅰ	哲学の歩み
学問入門Ⅱ	美意識の歩み
学問入門Ⅲ	【歴史】は どう書かれるか
学問入門Ⅳ	近代社会と法
学問入門Ⅴ	心と科学
学問入門Ⅵ	【教育】とは なにか
学問入門Ⅶ	数学の考え方
学問入門Ⅷ	物理学の世界
学問入門Ⅸ	宇宙の話
学問入門Ⅹ	物質の成り立ちと性質
学問入門Ⅺ	身体と健康
学問入門Ⅻ	フィットネスとトレーニング理論

現代の文化状況	
現代の文化状況Ⅰ	歴史のなかの「現代」
現代の文化状況Ⅱ	現代ヨーロッパの芸術的特性Ⅰ,Ⅱ
現代の文化状況Ⅲ	文学からみたヨーロッパ現代Ⅰ,Ⅱ
現代の文化状況Ⅳ	現代日本の北方地域と文芸Ⅰ,Ⅱ
現代の文化状況Ⅴ	現代思想の潮流Ⅰ,Ⅱ
現代の文化状況Ⅵ	現代政治と女性の権利Ⅰ,Ⅱ
現代の文化状況Ⅶ	現代世界と民族文化変容Ⅰ,Ⅱ
現代の文化状況 総合講義	(複数講義)

言語コミュニケーションとメディア	
現代メディア論Ⅰ	情報化社会と情報の科学Ⅰ,Ⅱ,Ⅲ
現代メディア論Ⅱ	マスコミ論Ⅰ,Ⅱ
現代メディア論Ⅲ	言語コミュニケーション論Ⅰ,Ⅱ
現代メディア論Ⅳ	情報の分類と検索Ⅰ,Ⅱ
現代メディア論Ⅴ	統計情報の論理Ⅰ,Ⅱ
現代メディア論Ⅵ	日本語表現論Ⅰ,Ⅱ
現代メディア論 総合講義	(複数講義)

地球科学と環境	
地球科学と環境Ⅰ	天体としての地球Ⅰ,Ⅱ
地球科学と環境Ⅱ	地球の物質循環Ⅰ,Ⅱ
地球科学と環境Ⅲ	地球の地形形成と北方地域Ⅰ,Ⅱ
地球科学と環境Ⅳ	植物生態系からみた北方地域Ⅰ,Ⅱ
地球科学と環境Ⅴ	北方の地球環境と動物Ⅰ,Ⅱ
地球科学と環境 総合講義	(複数講義)

ライフサイクルと発達	
ライフサイクルと発達Ⅰ	世代間コミュニケーションⅠ,Ⅱ
ライフサイクルと発達Ⅱ	学習と発達Ⅰ,Ⅱ
ライフサイクルと発達Ⅲ	教え方と学び方Ⅰ,Ⅱ
ライフサイクルと発達Ⅳ	戦後教育と学歴社会
ライフサイクルと発達Ⅴ	社会教育とボランティア
ライフサイクルと発達Ⅵ	いかに生きるかの哲学Ⅰ,Ⅱ
ライフサイクルと発達Ⅶ	【健康】と社会スポーツⅠ,Ⅱ
認知の発達と心理 総合講義	(複数講義)

現代世界と北方地域	
北方地域論Ⅰ	北方地域の地理的特性Ⅰ,Ⅱ
北方地域論Ⅱ	北方地域の歴史的形形成Ⅰ,Ⅱ
北方地域論Ⅲ	世界経済と北方地域Ⅰ,Ⅱ
北方地域論Ⅳ	途上地域としての北方地域Ⅰ,Ⅱ
北方地域論Ⅴ	北方地域の民族文化Ⅰ,Ⅱ
北方地域論Ⅵ	世界の人権問題Ⅰ,Ⅱ
北方地域論 総合講義	(複数講義)

哲学	人文
倫理学	
論理学	
芸術論	
歴史第一	
歴史第二	
国文学Ⅰ	
国文学Ⅱ	
外国文学	
アイヌ文学	

社会思想史	社会
経済学	
政治学	
法学	
心理学	
教育学	
社会学	
図書館学	

数学	自然
物理学	
天文学	
化学	
地学	
生物学	
統計学	

地理学	総合
国際事情	
北海道文化論	
情報科学	
マスコミ論	

体育講義	保健体育
体育実技	

英語	英語
英語講義	
英会話	

ドイツ語	第二外国語
フランス語	
中国語	
ロシア語	
日本語	

資料1-③ カリキュラム・プラン／英語

英語

4・3 年	後期	Oral Communication III, IV -(b)	2・3・4 年共通	後期	Writing II -(b)	資格コース II -(b) (TOEFL, TOEIC)	Reading II -(b)	英語 単位 演習	選択 4単位		
	前期	Oral Communication III, IV -(a)		前期	Writing II -(a)	資格コース II -(a) (TOEFL, TOEIC)	Reading II -(b)				
2 年	後期	Oral Communication II -(b)	2・3・4 年共通	後期	Writing II -(a)	資格コース II -(a) (TOEFL, TOEIC)	Reading II -(b)			英語 単位 演習	選択 4単位
	前期	Oral Communication II -(a)		前期	Writing II -(a)	資格コース II -(a) (TOEFL, TOEIC)	Reading II -(b)				
1 年	後期	Oral Communication I -(b)	2・3・4 年共通	後期	Writing I -(b)	資格コース I (TOEFL, TOEIC)	Reading I -(b)	英語 単位 演習	選択 4単位		
	前期	Oral Communication I -(a)		前期	Writing I -(a)	資格コース I (TOEFL, TOEIC)	Reading I -(a)				
		総合英語								英語 単位 演習	選択必修 2単位 (1単位×2)
											2- 選択必修 1単位 選択必修 1単位

1クラス30人以下-----> 専任2名+非常勤15~20名 (二部除く)

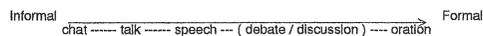
英語使用のskillごとに3つのカリキュラムを用意する
Reading, Writing は、いくつかの教育方法を包含する (『講義』『作文』に限定されない)

英語カリキュラムを編成する際に考慮したことから

1. 英語 (skills) の教育と、英語をめぐる「知識 topics, theme」の教育
2. skills の下位分類



3. Oral Communication の教育



言語的・非言語的な差異と、知識背景。

4. Reading の教育
さまざまな指導法 (精読/多読、間接法/直接法) さまざまな技術 (Skimming, Scanning, Paragraph Organization, Finding the Main Idea, Summarizing)。
『訳読法 Grammar Translation Method』に限らない。
5. Writing の教育
「和文英訳」に限らない指導法。
「書くこと」の諸要素に着目した指導法 (Content / The Writer's Process / Audience / Purpose / Word Choice / Organization / Mechanics / Grammar / Syntax) Process Writing

資料1-④ カリキュラム・プラン／第二外国語

第二外国語

学年				
4	後期	演習 VI		会話 VIII
	前期	演習 III		会話 VII
3	後期	演習 II		会話 VI
	前期	演習 I		会話 V
2	後期	講義 IV a	講義 IV b	会話 IV
	前期	講義 III a	講義 III b	会話 III
1	後期	講義 II a	講義 II b	会話 II
	前期	講義 I a	講義 I b	会話 I

ガイダンス (連休前)

外国語選択の学部ごとの差異

一部	経・法・日文	選択必修 4単位	英独仏中露
	英文	選択必修 6単位?	独仏中露
	工	選択	英独仏中露
二部	全学部	選択	英独仏中露

- 1年次=前後期・各3科目
- 2年次=前後期・各3科目
- 3年次=前後期・各2科目
- 4年次=前後期・各2科目

= 4単位 (1×4)
 = 8単位 (4+4単位・英米のみ)
 「演習」は選年4単位

- 1年前期の3種類は、全体で1つの授業を構成する (共通教科書など)
- 2年前期までに、基礎的な授業を終わる
- 3・4年次は「検定」に向けた授業も展開する
- 「講義」の内容は、各国語によって異なる

岡崎 これは全学カリキュラム検討委員会とはまた違うのですか。

大谷 その前の段階ですね。これ、教授会でもって山口先生と藤田先生二人で発表されましたよね。みんなで突っきましたけれども。

本城 これ、なかなか悪くないと思って。

山田 なかなか斬新な試みなのでちょっとびっくりしました。

岡崎 じゃあ藤田先生の作品やね。

小島 詳しかったですね。こういうのは基本的に藤田先生が意見出してきちんと詰めてくれるのですね。いろいろなことをばあっと。みんな勝手なこと言ってもまとめる人いないでしょう。みんな勝手に言ったら全然まとまらないよね。だからちゃんと形にしてくれたので、こういうふうになっているのだけれども……。

本城 たまたま97年ロンドンへ行ったときに藤田さんから電話あって、現代文化論を担当してもらえないかという、新しいカリキュラムも具体的に決まっていたものね。僕アメリカ文化しかできないけれども、それでもいいですかと言ったら、それでいいのですという話。ああそうなんだ、もう決まっちゃっているんだと思いました。

【学部と教養部の「確執」】

小島 当時、各学部は犬猿の仲でしたっけ。どっちかというと。

本城 そう、確かにね。やっぱり、それは学部教育を担う人と教養教育の人との対立があったのかな。でも、教養部改組のちょっと前に、東北学院大学は教養学部改組してい

るので、うちが解体した後、そういう道もあったのかなと思いました。だからそれは多分、大学設置基準大綱化前後からもう議論していたから間に合ったのでしょうけれども、全く逆ですよ。学部改組したのと教養部をなくしちゃったのと。

岡崎 それはもう、教養部をなくすというのが懸案やったからね。学部にとってはね。

小島 うちの場合は、やっぱり教養学部とか、という発想は言葉すら出てこなかったですし。

岡崎 東大のようにL字型に上にも伸ばすという考えが出たことはあったけど。

小島 そっちのほうはね。だけれども、うちの中ではもういかに教養部を潰すかという、その教養解体意思が……。

亀井 教養解体が、極論になりますけれども、前提だったような気がしますね。

本城 それはそうだよ。だから学部を後から改組した後、語学を必修にしないという方針を見て、ああすごいなと。しかもたくさん取れるようにするのですよね。自由選択をすごく広くして、大学で学部として語学を全然必修にしないという選択が、よっぽど嫌っていたんだろうなという。教養ってなくてもいいということ……。

【学部の目線と教養部の目線】

岡崎 やっぱり学部に所属してわかったのは、学部の人というのは、本当に学部を中心に物事を考えるのね。まず自分たちの学部のことを軸に、でもこちらは教養部時代の経験が基礎になっているので、まず大学のことを考えるわけね。だから本当に折り合えないこ

とというか、発想が違うからかみ合わない話が物すごく多いです。どうしてそんな議論が出るのかお互いに理解できない。

大谷 同時に、教養の中で先ほど岡崎先生がおっしゃったけれども、この議論しているときに、本当に社会科学系列の人たちってまとまらないな、というのをもうつくづく感じましたね。

小島 課程の教育の中にも、外の話が全然入ってこないのですよ。だから教養部というよりも、要するにもう全然系列としても成り立っていませんから、私の場合は個人なんですよね。

本城 社会科学系列は、固有の問題としてそうなのでしょうか、そこにいた先生たちがたまたまそういう、個々の先生の特徴なのか、社会科学系列自体の特殊性がそういうふうになっているか。両方なんですか。

小島 いや、人でしょう。別にそんな仲悪くなる専門性というのはないと思いますけれども。

本城 例えば、主義主張が強くていろいろ自己主張するとか、そういうのも関係ある。

亀井 多少はあったかもしれないけれどもね。

本城 そうだね、でも学部の気持ちもわかるんだよね。やっぱり2年間じゃ学部が考える教育は難しいという学部の専門の人たちの。だから、くさび形という

もありましたよね。
小島 だから教養は教養で今、岡崎さんの言う学部は学部しか考えないと書いていましたけれど



も、教養は教養で全体のことを考えるとと言っても、やっぱり2年のことしか考えていないのですよね。じゃあ逆に3、4年の各学部の専門性にどうつなぐかという、そういう学部のほうのニーズを教養部で真剣に考えていたかということ、考えていなかったのですね。だから学部の不満もわかるのですよ。多分、学部の立場に固執しなくても、「教養部は」と。で教養部は「学部は」と言っちゃって、ある意味互いに門前払いしたような、全体にそういう雰囲気があったんじゃないでしょうか。

山田 当時、小島さんの研究会であったみたいに、同じ研究者としてはずっと専門的なテーマを持ってやってきたのが、採用された大学学部の所属によって、専門担当、一般教育担当となり、また別表1、別表2という区別の中で、異なる立場に置かれる。しかし、教養担当となれば、いろいろな課題が託され、教養部に属したがゆえに託されるようなことなんかも含めて、個々にもいろいろな問題があったのかな、というあたり感じます。

岡崎 教養部としてまとまりがなかったこともあり、教養部が解体するときに全学カリキュラム委員会で、それぞれの教員の希望に添ってこれまで1年間でやってきたものを半年にしていってしまいませんか、そんなことが自由にできてしまったんだね。あれで、まとまりがないなりにいろいろな分野をカバーできている教養のカリキュラムが、相当偏ってしまったという印象を持ちましたね。

例えば、学部の方から見て、物理の人が1年間文化系の学生に教えるのなんて嫌だ、と思ったら半年にしていってしまいませんか、そういうことが実際に起こって、やっぱりそういうとこ

ろが薄くなってしまったんだわね。もうみんなの関心が学部中心になっていったしね。

亀井 僕の勘違いかもしれないのですけれども、



やっぱり学部に行ったときに、大学4年間ではなくて3年で終了させるという雰囲気なんかありました。もう3年で卒業させてあと1年はもう就活、だから、という雰囲気が何となく、私の勘違いかもしれませんが、教養2年、学部1年半、学部ではなくても3年で大学教育を終わらせ、あとは就職、みたいな雰囲気があったような気がしますね。

岡崎 同じことを聞いたことがあります。就活だけではなくて4年生は1年間自由にやらせるという、なんかそんな感じでしたわね。

亀井 そうすると、やっぱり教養の個々を圧縮していかなければならないということがあったかもしれないですね。

山田 就職が早期化してきた、早まってきた当時の事情も確かにありますね。

【教養科目の年次配当】

大谷 今、岡崎先生に言われて思い出したのは、全学カリキュラム委員会で年次配当しないという結論。我々語学はずっと担当して、要するに副専攻と同じような考えで4年間やるんだということを言っていたのに、講義担当の先生方があっさりとそれを下ろしてしまっていて……。最低限でも2年までと考えていたのですがね。4半期の積み重ねだから1, 2, 3, 4という、そういう階段を踏むように、専門課程で細分化したり専門化したりす

ることが、教養でもできると最初踏んでいたんですよ。すると、持ち帰ったらあっさりと、それ要らないと言われて驚きましたよね、年次配当要らないというような主張ね。あれは全部実は学部からの押しだけではなくて、教養の中で起きたことですよ。

岡崎 あともう一つ、年次配当がなくなった理由として、教養科目はいつ取ってもいいんだという、そういう主張がありましたよね。4年に取ってもいいんだというね。

本城 その理由は特に言っていない。

岡崎 教養科目が積み重ねであるとは思っていなかったようなんですよ。

本城 余り考えていないと。

大谷 それ、強く言われましたね。今やもう積み重ねということを考えないで、こっちはそうは行かないということで。ただ、これは私たち頑張りますよね、当然語学のほうは。
岡崎 語学だけは、それは主張できるけれどもね、残りの科目は、まずこれを取ってからこっちを取りなさいみたい、そういう有機的なつながりはなかったからね。ばらされてしまっても文句は言えないようなところがありましたね。

本城 だから、法学部の学生に向けては、どれをいつ取ってもいいというサービスは用意するのだけれども、それを担当する教養の人に対しては配慮とか、なかったような気がするね。今でも割とそういうところ、ちょっとありますね。

亀井 いえいえ。

【「タコツボ化」した専門と教養】

亀井 教養の積み重ねの学びの線は三つあり

ましたよね。それが科目によって全部別の、だから自分の専門以外には口出さない、という雰囲気はちらっとありますよね。自分の専門に近い人だけで結構人事を動かさなきゃならないという。

岡崎 「干渉」されるのが嫌だという人たちはいるからね。人にも「干渉」しないけれども、自分たちのことにも「干渉」してほしくないという、そういう関心が閉じてしまっている人たちがいますね。

本城 それって大学の教員ってある程度そういう人は多いんじゃないですかね。

岡崎 でも、教養部出身の人って余りそういうのが基本的にないでしょう。自由に別の分野に対しても文句を言うような、そんな世界だったからね、教授会が。

山田 うちの卒業生でも、授業で何を覚えているかと聞いたら、結構教養科目のことを覚えていて、化学でこんなことやったとか、この先生こうだったとかね、なかなかしっかり覚えているのですよ。専門だったら、ただ難しかっただけで、ただの単位所得みたいな感じだけれども、当時なんで教養部でそういう雰囲気があったのかなっていうのも今回ちょっと知りたいです。

大谷 別に学園の教養部だけに限ったことではなくて、教養教育って基本的にはそういうことでしょね。私たちやっぱり心になんとなく戒めとしていたのが、要するにタコツポの中に入っているはいけないということ。それから、専門性に安住するというのは墮落である、と



いうことを何度も言われました。それに、何も知らない人に話をするんだということですね。専門のところにいる限り、顔見知りや相手に専門用語を使って気楽にやりますよ、いつまでも。そうじゃなくて、何も知らない人と初めて会って、自分のやっていることを説明するというのは、それなりに大変ですよ。それを心がけるとか大分言われましたよね。どこの大学も多分そういう傾向があったんじゃないですかね。

山田 それは外部の先生たちからも指摘はあるんですよ。まだ北海学園は難しく教えているが学生はちゃんと受けとめられているか、を意識しないで教えているんじゃないかと。放置されるのはまずいな、と思います。

岡崎 僕は二つの学部しか知らないのだけれども、教養部は意見を言うときに自由だったという印象がありますね。学部に移った最初の年、98年だったと思うけれども、最初の年。教授会で思ったことを言ってたんだわね。そのやり方おかしいんじゃないですか、とか普通に。そうしたら、やっぱり受け入れられない感じがありましたね。若い人から「あんなこと教授会で言って怖くないんですか」って言われたりして。年寄りが言うことに対して若手は反論できないという雰囲気がありましたよ。だから、すごく雰囲気違うところだなと思ったんですけど、結局好きなことを言っていましたね。

山田 やっぱり、いろいろな分野の人が集まっているから、自然とそうなるって行くんですかね。

岡崎 あと、自由に言えないところというのはだめだなというのは、その後実感している

よね。

大谷 教授会だって長かったですね、毎回。

小島 教養部。

大谷 根本のところから話始まるでしょう。「そもそも論」が多くって、この辺になるともう大活躍の先生って必ずいたよね。先生も含め、岡崎先生も含め、いや長いないつも思っています。

山田 大活躍の先生といたら。

小島 いっぱいいましたよね。

本城 僕は経験した学部で、そんなになんか意見を言うのは言いづらいと思ったことはないけれども、やっぱり学部のこと以外には関心余らないっていうのは思いましたね。だから教務委員会の報告でも、全体のことというのと長くてみんな嫌がる。学部のことだけに集中して言わなきゃなんないと、そうすると全学的なことって何となくだんだんわからなくなってきた、関心なくてわからなくなってくるというのはあるような気がしますよね。

大谷 委員会はそうですね、確実にね。

【教務委員会にも課題が……】

山田 それちょっと教務委員会としても何とかしなきゃなという……。

岡崎 今は教務委員会ってルーチンワーク的なことしかやっていないでしょう。問題だと思ふよ。

山田 教務委員会ってそういうところだと思っていました。

岡崎 いやいやそんなことないって。

本城 でも、いろいろ議論することは教育開発運営委員会のほうっていうふうに分けてはいる。

岡崎 課題を教育開発運営委員会に回してしまっているけれども、本来違うんじゃないの。
本城 でも、一般教育と学部のカリキュラムと教養と両方やっているから、実務的なことだけでもいっぱいいっぱいではあるんですよ。

山田 ということをしなが、結局一般教育全般のこと、今回いろいろ実感しましたが、分属している各分野の教員を含めて小委員会を立て、一応各小委員会と教務委員会から一般教育の担当者も各学部と連携して決めるんだけれども、やっぱりその決め方、どうい人をとるのか、とか何かを含めて、ちょっと薄くなっているというか、学部任せになっている感じはあります。そこで一般教育担当者があまり何も言えないような感じになっているのがどんどん続いていくと、本当に一般教育を考える場所というか、こういう方針だからこういう人をとるとか、そういうものが出てこないし、小委員会もなかなかうまく機能しない。これはちょっとどこかで何とかしないと、と言いながら大きな方針がもうやっぱり学部のカリキュラムの中に入っているから、どうしたもんかなと。

本城 共通教育委員会のときもそうだったんだけれども、教務委員会は、学部からの委員2名のうち一人は一般教育担当で、一人は学部の専門って、共通教育でやっていたのですよね。でも、教務委員会の規程ではそれがない。

岡崎 けれども、教務委員会に一本化するときの実務委員会では、その方針を決めたというよ。

本城 でも実際にはそうならないから。

岡崎 明文化されていないからね。だから、工学部は共通教育の人が出たことがない。工学部では教務はいつも専門科目の人が担当するので……。

本城 あと、学部の学科のいろいろ委員を出す都合はあるのでしょうかけれども、そういうふうにしちっと明文化しないと、一般教育のことも知らない学部の専門の人ばかりが教務委員会にいるっていう、そういう風景って結構見られますよ。

岡崎 それで、教授会での報告には一般教育の話はあまり出てこない。

本城 そうそう。人事でも、一般教育の先生の意向も入ってるんだらうけれども、少し趣が変わってきている人事があっぴくりしましたね。

岡崎 どうしてもやっぱり学部の意向が入ってくるんだわね。学部の教育にもかかわってもらえる人、というような発想で人事をするので、こちらから見るとなんかそういうことは本当は全然重要じゃないのに、なぜそんなこと考慮するんですかいう、そんな視点での人事になっているわね。

本城 でもやっぱり年齢構成とか、ジェンダーというか、女性教員を優先的にとか、それは入ってきますよね。

岡崎 そういう発想でやっている。

本城 一般教育の人もそうですね。多分にそういうふうになっていますね。やっぱり学部学科の年齢構成とか女性を優先とかというのは働いていますよね。

大谷 でも、共通教育の立場から見たときに、それが歓迎できないことではないですよ。幸い合致していますよね。

【人事について】

山田 今はね、一般教育に関しては小委員会で機能しているところと機能していないところがあって、あれをもっと人事だとかもっと位置づけを高くして、各学部にも反映していくような形、生かし方みたいなことを考えなければいけないと思いました。

岡崎 でも難しいな。もう今の共通教育を担当している人のほとんどは、教養部時代を知らない人でしょう。入ったときから学部所属しているので、どうしてもやっぱり学部が



大事だという発想になるからね。だから、その人たちが集まって議論しても、本当にまとまるかどうかはわからないと思うよ。

山田 でも、やっぱり一般教育に関する大方針というか、カリキュラム体系の位置づけとか、そういうものがなかなか曖昧で、はっきりしていない、決めるところもない。

本城 そうなんだよね。森下先生のときに一般教育改革の準備して、僕のとくにやらせてもらったんだけど、やるのが精いっぱい、今言った小委員会がいろいろ实际的に動けるようなやり方を検討できないで、山田さんのほうに送っちゃったんで、そう言ってるうちに岡崎さんの言うように教養部経験していない、新任の一般教育担当者が多くなると、余り必要を感じなくなってしまっている。そういう時間的なギャップというのはあると思うんだよね。

【教養か専門か】

山田 タコツボ化をタコツボ化してはいけないというのが、やっぱりキーワードみたいな感じになっていると思いますが……。

岡崎 それをみんながそうだなと思えば何か新しい方向を考えるけれども、思わない人もいっぱいいるでしょう。専門教育というのは、基本的にタコツボ的だと思うんだわね。ほかの分野から口を出されると、かえってもうイライラするみたいなね。

小島 なんかに教養部解体のとき、議論としては教養をなくすのではなくて、学部教育というのは、そもそも本当の専門ではなくて、本当の専門は大学院だと。もう要するに、それぞれの専門科目を通じた教養教育なんだと、

そういうようになったのですよね。

だから、あの時の議論を本当に追求していけば、学部の先生方にとっても、今言ったみたいにもっと基礎的な、あるいは幅広い教養的なところから、自分たちもタコツボではなくて、むしろ裾野を広げていって、その上で専門性を積み上げてそっちの土台のほうから教えていくと。結局教える側も幅が広がるし、教えられる方はただ専門性というだけではなくて、それが即教養教育にもなるという形が理想的だ、みたいな話をしていたのですね。

だけれども、やっぱりこれってみんながそういう問題意識を、またコストと時間もやっぱりかかりますから、それぞれの人たちの自分の専門性を高めるほうはやりやすいけれども、これを広げるというのは基本的にはコストはかかるけれども、しかも教員にとってはパフォーマンスというかメリットは余りないのですよね。学生にしかないので、専門家として見たらやっぱり専門性を深めていったほうが、ある意味パフォーマンスとしては、つまり研究者としてのメリットはありますよね。そっちのほうの方がやっぱり評価を得られる。やはり裾野を広くしたって、これ評価を得られませんから、大体。

岡崎 実際、全国でもいろいろな大学が教養教育をどう位置づけるかということを考えているけれども、やっぱりそんなにうまくいっていない。というか、どこも持て余しているところがあるからね。ただ、早稲田大学や国学院大学みたいに副専攻を設けた学校で、自分の専門ではない分野をもう一つ副専攻として選ばないといけない方式にすれば、例えば

法学部の人は法学以外の分野も修められると
なったら、それは経済を取るかもしれないけ
れども、教養関係を取るかもしれないし、そ
のような選択できる複線化をしていくと、少
し裾野が広がった教育ができると思う。うち
の大学なんか副専攻制になったらいいなと
思っているのだけれども、そもそもそんな話
をする場所が、教育開発運営委員会以外ほ
どこにもないですね、本当に。学部の中でも
そんなキーワードはないし、なかなか話が広
がらないんだわね。

小島 経営学部でも経験したのですが、心理
学を経営学の中に位置づけるというのは、ア
メリカなんかではもう普通に行っているの
でしょう。だから、当初はすごく期待されて
いるんじゃないかなと勘違いしたのですけれ
どもね。実際に、やっぱり学部ではそういう
ふうにやって、そっちはそっちであんじょう
やっておくれ、こっちはこっちでやります
つて。

最初は私も教養部と同じように、みんな
で研究会やりましょうと、3回ぐらいはやった
かな。みんな「珍しくアカデミックな集まり
ですね」とか言いながら、結局そういうリッ
プサービスはしてくれるんだけど、次に
いろいろ変な会議ぶつけられたりして、結局、
という形なのですよ。やっぱり他の専門と
も忌憚なく意見交換というのは難しいのか
なって、私は楽しいなと思ったのですけれ
どもね。なんかちょっと……。

【器もないのに専門、専門って、】

大谷 でも、入ってくるお客さんのことを考
えたときに、それを一つの器だとして、その

器に必死になって専門教育を注ぎ込んで、一
体どんなのが出ていくのでしょうか。そもそ
も私は自分の専門をここで生かしていない、
と言ったら何ですけれども、やっぱりタコツ
ポに入らずに何とかやっていかないと食って
いけない。中国文学家を育てたってしょうが
ない、ここでは。立場がそういうことだった
ものですから、専門を教えようなどと一度も
思ったことないのですよ。ひたすら自分の専
門のものを注ぎ込んで、それでなんか成果が
できたと思っている。きっとその先生はハッ
ピーですよ。でも本当にその子たちに意味
があるのかどうか、それね。

岡崎 やっぱり専門の人にとって、4年間一
貫教育というのは専門教育に関する話だわ
ね。小島さんが言うような、広い教養の科目
も含めての4年間一貫という発想はなかなか
ないからね。ただ、学生から言うと、やはり
1年目教養科目ばかりだとすごく不満がある
でしょう。自分は教養科目を勉強しに来たん
じゃないと。例えば、建築を勉強しに来たん
だと思っているのに、最初ほとんどは教養科
目だと。学生は早く専門に触れたいと思っ
ているので、ちょうどどちらもいいように配分
しないといけないのが難しいところやと思
うわね。

山田 例えば、社会科学の分野でも歴史的な
背景などの理解がないと、やはりなかなか通
じないし、その専門分野も含め社会認識の歩
みそのものが歴史でもある。

小島 私はいつも心理学を教える際は、やっ
ぱり一番最初は心理学史なんですよ。認知
心理学という、一応タコツポ的なあれなんだ
けれども、でも、やっぱりそこに行くまでに

3分の1ぐらいは心理学史なんですよ。学生がどう思っているかはわからないのだけれども、私的にはやっぱり心理学の歴史をやっていく、なぜ認知心理学というの。今の時代に、大分賞味期限は切れているのですけれども、今のところそういうふうになっている。何でそういう心理学が重要になっているんですか、ということ、やっぱり順序立てて話したほうがいいかなと思うのですよね。

何でも理解を深めるには、それぞれの学問の歴史がその道筋としてあるので、近代科学の科学革命とか、そういう17世紀の枠組みがそういう心理、心というのを科学で扱うというか、それまでは哲学であったり、心なんでも科学で扱うなんてそもそもおかしな話で、観察も実験もできないはずのもの、それをもう無理やり実験するという、そんな話が何で起きてくるのかというあたりを。みんな心理学って、当たり前のようにそうだと思っているから、何となくああ、心理学ですかって、というのは、実はよく考えたらおかしな話なんでね。そういうことを伝えたい気持ちがあるんですよ。

だから、そういうのを建築だったら私は建築の歴史とか、建築ってどういう、世の中で、例えばヨーロッパでも、あるいはアメリカでもいいんだけど、何でもそこそこの建築というのはどういう歴史があるのかという、そういうことが面白いと思うんだけどね。そんなの知った上で、では今の建築技術どうなんですか、という話になっていく。やっぱり歴史というのは大事なので、その歴史の部分って、それぞれ教養部のやっていた日本史とか世界史というんだけじゃなくて、

その専門の中での歴史ってあるじゃないですか。物理なら物理の歴史とか、すごく面白いと思うのですよ、物理の歴史なんてね。発見のきっかけが物すごく、19世紀の大きな転換があって、そういう歴史を経て初めて現代の物理学があるだろうと思うのですね。そういうのってやっぱり、ただテキストにある物理学を越えて、私として自分の分野でかなり広くそういうこと教えられると思うのだけれども、もう学問の先端的なことだけ、専門的なところだけ言われたって、もうさっぱりわからないって。英語だってそうでしょう。

本城 そういう専門の話ですか。

小島 歴史はあるでしょう、やっぱり。

本城 今、建築の話だと建築科の学生にとっては、もしくは建築科の教員にとっても住まいの歴史みたいな教養的なものと、現代の建築とかの話を開講科目や年次もバランスとってやれば、何とか1年の学生も建築早くやりたいんだという学生も満足できるようなものを教養的に配置できるような気もするのですけれども。

僕、38年間英語教師やっていて振り返ると、みんな知っていると思うけれども、大谷さんもそうだけれども、英語教育の専門家でない英米文学の専門家がずっと教養の英語を教えていたっていうのは、ずっとそうだった、ほかの大学も日本全体がそうだったんですよ。だから、そういう英語を教える素人みたいな人間が教えてきたことの反省とか、それなりの試行錯誤はあるのですが。ただ、僕と



かの後任って、きっと英語教育になるので、それ自体は英語を専門的に教える人が教養の英語を教えるというのは正しいとは思いますが、やっぱり文学をやってきた人間のそういう英語教員もちょっとは残してね、という気持ちも一方ではありますね。反省と現代の趨勢に対する納得はしています。

あと、英語リーディングというのが、実は英会話よりも真の英語力に近いところがあると経験的に思います。アメリカに英語研修に行くと、最初は南米の学生とか中東の学生とかよく話す文化を持っている学生がよくしゃべれるのですよね。日本人はシャイで余りしゃべれないんだけど、1カ月、2カ月たってくると、しゃべる学生たちはすぐにリーディングの力がつかないのですが、日本の学生はそこそこリーディングの力を持っているのです。一方では英会話の能力って短期間でつくから、少したつと日本人の学生のほうが英語ができるという、そういう事例を結構見えています。だから日本の英語教育に対する非難というか、読むだけで会話できないというのは余り当たっていないなというふうに思っていますね。

小島 余り当たっていないよね。やっぱりそうなんだ。

本城 ただ、僕らみたいにみんなが教養で習った文学やっている英語の先生ばかりというのは確かに効率はよくないよねという、多分そういう教養教育を受けてきた大学教員が結構教養教育反対というふうに言っているのかなと。

大谷 私、時々本当に不幸な教養時代を過ごしたんだろうと思うのです。つくづく。

【三つの失敗】

本城 すごく思いますよね。だから、そういう教育をよくわかっていない文科省の人たちと、不幸な教養教育を受けた学部専門の人たちが教養部を潰したんじゃないかなという。我々もちゃんと統合的な全体の教養教育をちょっと考えるのを怠っていたかなという。その三つだよ。自分たちの責任もあるんだけど。

岡崎 学部の教育との連携というのは本当に考えなかったからね。

山田 どんなイメージになるんやろうね、逆に連携したらね。

本城 そうだよ。

大谷 あと、こんな例がありました。大学教育学会があつて、2回カリキュラム委員だから行かなきゃいけない、福島にも行ったことありましたが、そこで、慌ててつくってましたよ、統合的なそういう学際的な研究テーマを。地域研究なんかは複数の分野の人が加わりそれから体育の先生もよく入られてました。例えば私が福島で聞いたのは、カヌーでもって湿地帯を歩くもので、そんなこともあつて、そこは体育の先生に教えていただいてという風にね。あと、自然科学の先生も、当然植物学の先生も入っているんです。それであと歴史ですよ。それから北海道地区だったらアイヌの文化とか、そうやって統合的なものをつくる……。

本城 それは大学教育学会でなくて、一般教育。

大谷 そうか。一般教育、当時はね。

本城 あれ、一般教育学会が名前をうちと反対に共通教育研究会に変えました。実は全国

に各地区あったんだそうです。今は東北・北海道地区だけ残っていて、我々共通教育委員会のときも教務委員会のときも派遣されますよね。

大谷 東北・北海道地区しか残っていないの。私、福島大学と北星学園のときと2回行ったんですけれどもね。

本城 行きましたよね。だから東北と北海道で交代で開催して、うちでやったときも皆さんに協力してもらって10年ぐらい前にやった記憶があります。

多分ね、文科省の締めつけが厳しくて、教育についていろいろ検討したり研究したり刷新したりする、教育も変えたりしなければならぬのは、小樽商科大とか教育大とか旧二期校です。一番文科省に言われていろいろな成果を出して、その一般教育研究会でも山形大とか福島大とかすごい積極的に人を送ってきたり、その成果を刷新したりしているのですよね。そういうのなんか見ましたね。樽商もそうですね。

大谷 学園に何度もお声がかかるのに学園は断っていたでしょう、すごく面子がなかったですよね。2次会に行って、そこでみんなから言われるのですよ。2回ともそれで、断ってこいと言われて行くのですよ。ペーパーだったもんだから。

本城 僕も引き受けようとしたら、事務長ができませんとか言って。それで、多分皆さんに声かけて手伝ってもらって、北海学園でやったんですよね。あの後やっていないよね。

岡崎 それはもう10年ぐらい前の話。

大谷 それやったのはね。私の例は20年前。

本城 そうそう。何で北海学園やらないのって。

大谷 もし実現ができていたら、それまた楽しいもんだらうと思うのですけれども。

【各分野の教育方法について】

本城 さっき言ったけれども、英語は英語教育の人が14名のうちもう10名になっているのですけれども、中国語とフランス語はどうなんですか。そういう何々語教育という専門家が。

大谷 今は、語学教育、それから教育法という、そういう募集が多くなっていますね。それで、実は私の後輩たち、本当にたくさんオーバードクターがいるんですよ。文学だけやっていると食えない。

本城 そうなんですか。僕の後輩なんですけれども、アメリカ文学やっているんだけれども、やっぱり英語教育のマスターも通信で取ったりしているんですね。そういう人事に応募するときに文学だけじゃ食えないから、多分英語教育のそういう資格を持ってれば、それは両方でできて一番いいですよ。そういう教育法というのがきっと、僕にはちょっとなじまないけれども、一般的になってきていますよね。だから物理とかそういうのは余りないですか。物理学教育。

岡崎 いや、あるのかもしれないけれども、物理教育とか自然科学教育というのは、そんなに盛んじゃないと思うな。

本城 体育はありそうだね。

小島 社会科教育自体あります。教職だと理科教育とか教育法でやるけれども、あれは本当に高校生向け、小中高向けですね。

大谷 学会の中でそういう分科会になんかあるんですかね。言語学会だと、その中に教育があるんですよ、教育部門が。それはどうなんでしょうかね。

亀井 方法論とか教科教育法というような専門分野に近い教育法、体育教育というよりも、研究分野の一つになっていますもんね。

山田 指導法とか今コーチングとかあるけれども、そういうもの、そういう指導者を育てる。

亀井 あれ、コーチングなんか本当は心理学の先生が多いのですよね。両方兼ねて。経営学専門の方も多いですね。コーチング。経営学分野の方、かなり体育のほうに、これは食っていけるという感じが体育の専門家よりも増えてきていますよ。

山田 ちょっと変わったタイプというか、「古い」大学ではないような先生方も結構増えてきて、教え方そのものにいろいろ注目して研究している。これから採用なんかでも考えなければいけないのですかね。

大谷 両方あってほしいですけどもね。

山田 両方あるのが一番いいんですけどもね。

亀井 法学部の川谷先生なんかは体育哲学、スポーツ哲学で、体育の学会とか集まりの中で講演したり、専門は哲学ですけどもスポーツのほうに。

本城 スポーツ倫理学っていう本書いていますよね。

亀井 面白いですよ。

【教養ゼミとは】

岡崎 先のカリキュラム案にあるフレッシュ

マンズセミナーというのは、大学生としての基本的な読み書きとかの技術を教えるという内容でしょう。でも、あれ教養部でやっていたゼミ、何という名前だったっけ。

本城 クラス顧問ではない。

岡崎 教養セミナー、何セミナーだったか。

本城 それは後ですよ。

岡崎 いや、昔からあったでしょう。

本城 クラス顧問というのはありましたよね、教養部。

岡崎 今でも学部でもあるでしょう、クラス顧問。

本城 教養時代に教養セミナーの前の段階で、例えば語学のクラスで分けていて、違ったかな。

大谷 ありますけれども。

本城 それは大学での学び方の技術を教えるのではなくて、高校のホームルームみたいなのがあったのですよね。

大谷 新歓コンパがあって嫌々行ったという。それで、あとセミナーですね。私、教養ゼミって呼んでいたやつですよ。

岡崎 教養ゼミか、そうか。

山田 当時の教養ゼミは、資料2にあります、経済学部で教養がなくなった後で基礎ゼミとか設けましたが、初年時教育では各学部もいろいろ工夫して、入門科目などをやっている現状ですけども、当時はこういう形で分野ごとにこういうのをつくってやっていたり、この辺の状況とかどんなような取り組みだったのかあたりも一つの柱になるのかなと。



資料 2

平成元年度 演習 (教養ゼミ) 一覧
(昭和 62 年度以前入学者は特別講義扱い)

区分	担当教員	テーマ	対象学年	曜日	時限	定員	初回の演習日	許可者
人文科学演習	小野 誠二	生と死	1	水	4		4月26日	
	植木 幹雄	日本の陶磁史	1・2	金	4		4月21日	
	山根 對助	連句をつくる	1・2	金	4	15	4月21日	
	菱川 善夫	地獄の文学	1・2	金	4		4月21日	
	國田 祐作	造形の基本から表現まで―ヴィジュアル・デザイン実習―	1	水	4	男 10 女 10	4月26日	
	藤田 正	日本の近・現代に生きた人々	1・2	水	4		4月26日	
	木津 隆司	西洋史の流れ	1	水	4		4月26日	
社会科学演習	藤本 富一	憲法	1・2	水	5	12	4月26日	
	林 昭男	ファシズムと人民戦線	1・2	金	4	10	4月21日	
	西沢 悟	心理学を更に学ぶ	2	水	4		4月12日	
	村井 忠政	アジア NIES と中国	1・2	金	4		4月21日	
	橋本 剛	国家とは何か?	1・2	水	5		4月26日	
	熊谷 和夫	教育はだれのものか	1・2	水	5		4月26日	
	松田 光一	人間と技術	1・2	金	4	10	4月21日	
	小島 康次	認知科学入門	1・2	水	5	13	4月26日	
自然科学演習	山本 隆範	現代数学入門	1・2	火	5		4月25日	
	岡崎 敦男	原子力発電の諸問題	1・2	金	4		4月21日	
	相川・竹貫	基礎化学実験実習	1・2 1学期	金	4・5	40	4月21日 2学期受講希望者も1学期初回の演習に出席すること	
	相川・竹貫	基礎化学実験実習	1・2 2学期	金	4・5			
	齊藤 享治	札幌周辺の地形の形成過程	1・2	火	5	15	4月25日	
	佐藤 謙	植物分類学	1	金	4	10	4月21日	
	堀 淳一	地図と空中写真の読み方	2	木	4	13	4月13日 4月7日～4月12日正午まで教養部事務室にて受付けます	
総合科学演習	筒浦 明	「北海道の都市・村落」を勉強、調査し、人文・社会的調査法を身につける	1・2	水	5	10	4月26日	
	藤村 久和	語りつがれてきたアイヌ文化―特にアイヌ語地名―	1・2	火	5	10	4月25日	
	藤村 久和	語りつがれてきたアイヌ文化―特にアイヌ語地名―	1・2	金	5	10	4月21日	
	大江 敏美	民族紛争 (政治と伝統文化)	1・2	水	5		4月26日	
	鳥井十三雄	マスコミ、とくにその自由に関する日本と世界の実情	2	水	4		4月12日	
	杉村 徹	情報科学・関係する諸分野	1・2	水	4	15	4月26日	
	立谷 憲二	カナダは如何なる国か	1・2	水	4	15	4月26日	
	山中あき子	カナダの生活と文化	1・2	火	5		4月25日	
	A. ハンター (1学期) T. キング (2学期)	「カナダ研究」	1・2	金	4		4月21日	

岡崎 教養ゼミというのは、それぞれの人の専門の科目を経験してもらって、要するに勉強が楽しいということを伝えようというものだったけれども、最近のカリキュラムプランというのを見たら、そういう形式ではなくなって、基本的な能力を教えるとか、そういうふうなことになってしまっているね。これは教養部がなくなった後の各学部の方針なのかな。

読み書きとかの能力を教えるのは大事だけれども、やっぱり勉強って、わかるって楽しい、ということを教えたいね。

山田 というか、本当にそれがないとツールだけとりあげて、形だけやっても。興味関心が高まって、やっぱり何でも調べたくなくて、それでもっと調べたいというときにこそツールは身につくだろうと思いますね。

岡崎 そうだね、それなら教養ゼミも、自分の専門等でやりなさい、というわけでもなかったのかな。

【専門を超えた「教養談話会」】

大谷 これ持ち出しだったのですよね。でも楽しかったです、定員20名で。目を輝かせていましたね、学生たち。

あと、教養談話会は私大好きでしたね。岡崎先生の話とか大好きだったな。私も一応やったんですけども、書いていないね。

山田 資料3が教養部学術研究会というもので、これはおそらく研究の共有、ということで行なわれているということもあって、下から3行目の岡崎さんの最新の宇宙論が教授会が長引き中止という、そんなこともあったのかと。結構な頻度で年に一、二回、やってい

るということで、ずっと歴史的にさかのぼった資料があったので準備してみました。

大谷 これ平成元年までしか、その後のやつ載っていないから。この後も持ってくればよかったですね。

岡崎 これはなかなかよかったですね。

大谷 ケーキとコーヒーが出て。

岡崎 いろいろな学部でも同じようなことを試みてるんやろね。工学部でも試みた人たちいるらしいんだけども、続かなかつたらしいわ。何が問題だったのかちょっとわからないけれども。

本城 教養は結構いろいろバラエティーに富んでいて面白いですよ。自分の専門外のことを聞きたいという意識は総体的に強いのかな、教養の人は。

大谷 語る方も。語る方も面白く語ってくれましたよね。

【「余裕」がない？】

山田 最近感じるのは、他人の分野のことに関心を持たなくなっているとか、随分昔とは違ってきた。

大谷 本当に。ただ、もしそうだとするとどっちにしろ労働強化でもって、みんないつも忙しくて、とかもありますよね。

岡崎 うん、本当に余裕はないね、さっき学生は1年目に本当は専門の香りを嗅ぎたいんだと言ったけれども、基本的に専門の人たちは1年目に教える余裕がないからね。既に手いっぱい、新しい科目なんてとてもとてもという状況。本当にみんな忙しい。

本城 今、工学部の建築の1年生ってどんなことを教わってるの？

資料3 教養部学術研究会

第1回	昭和49年1月24日	広瀬隆司	留学事情（フランス）	
第2回	昭和49年3月16日	筒浦明	日本の河畔砂丘	
第3回	昭和49年4月25日	榎純孝	ハーディ文学の再評価について	小野・鈴木・佐藤卓
第4回	昭和49年6月13日	竹田憲司	体育の学習指導について	〃
第5回	昭和49年7月11日	村井忠政	予言者型社会学と祭司型社会学	〃
第6回	昭和49年10月31日	西沢悟	色彩のはなし	〃
第7回	昭和49年12月12日	佐藤謙	北海道の高山植生について	〃
第8回	昭和50年6月19日	木田橋喜代慎	雑誌のレイアウト	小野・竹田・吉田
第9回	昭和50年7月10日	山口修司	カフカの周辺	〃
第10回	昭和50年10月12日	筒浦明	カナダ・バンクーバー市および周辺の地理	〃
第11回	昭和50年11月7日	橋爪達雄	現代文学の一つのパーспекティブ	〃
第12回	昭和50年11月27日	熊谷和夫	教育における地域性について	〃
第13回	昭和50年12月11日	木下廣之	バイオリズム	〃
第14回	昭和51年月日	佐藤卓司	アルベール・カミュの不条理について	小野・竹田・吉田
第15回	昭和51年月日	山根対助	邪馬台国研究の現段階	〃
第16回	昭和52年月日	世戸憲治	エネルギーについて	小野・竹田・吉田
第17回	昭和52年6月16日	筒浦明	世界とところどころ	〃
第18回	昭和53年6月29日	藤田正	ある法制官僚の生涯と明治前期の法典編集	小野・松田・河口
第19回	昭和53年10月5日	橋本剛	ドイツからの帰朝報告	〃
第20回	昭和54年10月5日	立谷憲二	英国からの帰朝報告	小野・木下・橋本雄
第21回	昭和55年月日	筒浦明	帰朝報告	小野・木下・橋爪
第22回	昭和56年6月25日	熊谷和夫	イギリスの教育事情について	世戸・藤田
第23回	昭和59年12月13日	筒浦明	フランスの東西プロフィール	山根・林・松田浩
第24回	昭和60年4月6日	村井忠政	日本とカナダの相違	熊谷・佐藤卓・本城
〃	〃	植木幹雄	Bishop Butler のイギリスにおける実地見聞	
第25回	昭和61年1月24日	鈴木輝雄 鳥井十三雄	東欧と日本 カナダ人学者の日本観の偏見について	〃
第26回	昭和61年月日	小宮山英重	さけの魅力	熊谷・佐藤卓・本城
第27回	昭和62年4月23日	大江敏美	日米大学教育の比較について	熊谷・佐藤卓・本城
第28回	昭和62年5月24日	國田祐作	ICONとしての向日葵	〃
第29回	昭和63年3月11日	山口修司	西ドイツにおける語学研修と国際交流の難しさについて	〃
(中止)	昭和63年7月14日	岡崎敦男	最新の宇宙論 —教授会が長引き中止	熊谷・佐藤卓・國田
第30回	平成元年3月29日	岡崎敦男	赤道円盤の大域的振動論	〃
第31回	平成2年3月16日	筒浦明 鈴木輝雄 大沼盛男	ソ連極東事情 —筒浦教授退職記念特別研究会—	筒浦・西沢・桂

岡崎 専門科目もあるけれど、少ないです。基本的に物理や数学を除けば主に共通科目を取ることになる。

本城 あそこ1年ぼっちだもんね。じゃ一般教育も多いですね。

岡崎 専門科目の時間帯って決まっていますけれども、全部は埋まってないんじゃないかな。埋まっているところでも、専門といっても数学とか物理が入ってくるから、学生から見ると専門やっている気がしないよね。

本城 そんなに1年目から建築の学生は建築やりたい。

岡崎 というか、今、建築と言ったけれども、ほかの学科でもそうですよ。やっぱり学生は1年目、共通科目がすごく多くて、何しに来たんだかわからないみたいな意見を言っている。

大谷 ただ、あれですね。選択する分野によって大分違いますよね。だから、文学かなんかといったらほんやりで、家で本読んでたっていいんですよ。だから、ちょっと違いますよね。工学とりわけ技術でもって自然科学を応用する、そこは非常に明確に形が見えますよね。

岡崎 それはあるね。工学部の学生っていろいろな科目取りなさいよと言っても、やっぱり理科系の科目をほとんど取ってしまう、そんな感じだもんね。

本城 逆に、じゃあ人文の学生って教養みたいなもんだから、どういう科目を取りなさいって言いづらいし、体系的なものちょっと学ばならこういうのを取りなさいとか、こちらで指示しないとだめみたいだね、今の学生

は。

大谷 ほんやり、ほんやり……。

本城 でも、そうやって、そういうわけのわからない人文を選んできた学生って結構僕は見どころあると思うんですけども。

大谷 自分の近似値に似たような存在なんじゃないですか。近似の姿。

本城 でも、英米文化は英語をべらべらでできるようになりたいという、そこは多いです。日文のほうがもうちょっと文学志向的な。

大谷 私みたいなのがいっぱいいるんですね、ほんやりしたのがね(笑)。

岡崎 会話中心の授業なの？

本城 そんなことないです。ただ、学生に基礎ゼミで自己紹介させるとそういうの多いんですよ。ちょっとがっかりしちゃうんですね。だから社交的だけれど。

岡崎 会話なんて時間かければできるようになることだしね。

本城 僕もそういうふうに言っているんだけども。

岡崎 それよりは会話を始めたら、相手が何を考えているかを理解することが大事になるので。

本城 会話って自分が何を言うかということが大事。

大谷 それがない人が口先だけ発達させてもね。

本城 でも、そういうほうが就活の、割りといい数字になるし、日文の考える子って真面目なんだけれども、就活には弱いっていう。そういう学科の違いありますよね。

大谷 でも強いですね、それね。

【就職と教養】

山田 就職とかに役に立つとかどうか、ということと、教養を学ぶというのは、相反することなんですかね。それともつながっていくのか。

岡崎 我々の時代では相反することですね。でも、今それを融合しないとまずいよね。特に今、本当に就職と密接に関係したことをやるような圧力がかかってきているからね。

大谷 各教員、そうですね。まともな就職活動一度もしたことない人間がどうしてそんなこと……。

本城 そうそう、ないですよね。

大谷 教員の免許も持っていないし。

本城 これはまずいな(笑)。

大谷 運転免許も持っていないし。

岡崎 僕なんか宇宙だから、3年になって宇宙の専攻に進むときに、「もう就職は皆さんないと思ってください」って、教員に言われました。

本城 宇宙開発センターとか JAXA とかは。

岡崎 ごく僅かですよ、そんな就職先に行ける可能性はね。

【IT化の中の学びの変化の中で】

小島 ちょっと話を変えていいですか。

大谷さん図書館長されていて、私が前の前の前、図書館長したときに感じたんですけども、やっぱりアクティブラーニングとか、ラーニングコモンズ、私のときにちょっと始めた、あれは学生の図書館の使い方がすっかり変わっちゃったということで、図書館が危機感を持って始めたことで、つまり学生が来ないと言うのです。だから学生が大学に来

ないということで、ラーニングコモンズもそうですし。もう大学に来ないということは、自分でコンピューターとか使えれば、今ももうコンピューターでもなくスマホですよ。コンピューターを使っているのはおじさんだっけと言われてます。もう、私としては、ITに詳しくなければもうだめですって。学生たちはスマホを使っているの、もう自分では追いつかないんで、自分でやる時間もないし、学生に頼んで、ついていけないから学生にやらせませう、というような時代ですよ。

以前からもそういうことが始まっていて、だから教養教育ってそういうことも大事なんだけれども、そもそも知識の、大学の教育のあり方がなんか大きく変わりつつあって、その中で一般的な教養って何だろうという話も考える必要がある。役に立つ知識って、結構もう学生たちはパツパツと必要なものは取っちゃっているんですよ。じゃあそこで取れない知識ってなんだろうって。それがラーニングコモンズとかそういう発想になったんですね。つまり、来ないとできない教育をするということですよ。ディスカッションとか。しかし、その必要性ってどの程度あるのかということと、そういう学生と自分一人でこつこつそういうものを見ながら楽しんで勉強する、勉強というか知識を得ていくとかね。本当の勉強になっているかわかりませんがね。体系的じゃない、というのは間違いないんですけどね。

断片的だけれども、使える必要な知識は、図書館なんか来てやるよりも、あるいは本読むよりも、さっさと時間的にもコスト的にも物すごく今簡単に手に入るというのは事実で

すよね。だから、大学教育はそれに対して一体何が提供できるのかという、その辺のところの議論ってしているんだろうか。アメリカなんかでは、結構そういう新しい種の、もう要するに来なくてもいいみたいな、全部カリキュラムをオープンにしておいて、勝手にWeb上で多分ビデオ講義見て金を払えと、何時間幾らで払えと、そういうこともやっていますよね。

山田 革命的に変わりつつある……。

【問われているのは大学教育そのもの】

小島 そういうのを見ていると、こういう言い方あれなんだけれども、教養教育とかという議論は、ちょっとワントempoおくらせているんじゃないかなって。

もう今さら教養教育がどうこうという話をして、今の時代の学生、若い人たちが中学生だけではなくて、平均的な学生と優秀な学生と現実にありますから、その辺のどこにターゲットを絞るのかということと、やっぱり優秀な学生というのは視野に入れないといけないと思いますけどね。優秀な学生が何を求めているのかということと、それに合わせて普通の学生を普通以上にもっていくという、普通以上という、ちょっとそういう言い方で差別的な発言で申しわけないんだけど、やっぱりやる気のある人がどんどん自分でそのツールを生かして、もう大学教育なんかそっちのけでどんどん新しい学修、それ以上のことやっている学生もいるわけですよ。起業したりいろいろなことをやっていますし、でも、そういうのに乗り切れない学生っていますよね。そういううちの学生を見てい

ると、やっぱり結構多数派の人たちが何やっているかわからないと、そういう学生に対してどういう教育を提供できるかという、それは教養教育とか専門教育だという以前というか、そういう話ではなくて、もっとそもそも大学教育のあり方、彼らが何を、しかも求めているんじゃないかと求めているんですよ、余り。何か知らんけれども何か与えてほしいと言っているの、それを活性化させるにはどうしたらいいのかという、この辺のところをもっと我々は考えないと。我々自身が既存の学問の体系の中で教育されてきたので、発想がやっぱりちょっとブアかなって思っちゃうんですよ。

岡崎 それはあるね。

小島 だから、今の学生のレベルにはすごい幅があるので、すごい連中は何やっているのかというね、もうちょっと我々も勉強しないといけないかなって、そんな感じはしていますけれどもね。

【人と人のつながりから育つ】

大谷 小島先生はとても虚心な先生だなと思いましたけれども、と同時に、いかに優秀な学生であっても、やっぱり最後に「人文」というところに引きよせたい。相手が人であるからには、これ遠隔地教育だけでは済まない。スクーリングがやっぱり必要なんだろうね。どうしても人と人の議論というのはやっぱり必要なのではないのでしょうかね。そもそもラーニングコモンズはそういう役割ですよ。一度は集まってきて議論をぶつけましょう、と。それどんな形態になるかわからないですけれども、必要じゃないかと思うのです

よね。

今、文科省のほうで図書館の新機能というところで、図書館はそれまでの情報の集積の場所、それから参照の場所ではなくて、要するに新たな物を生産するための場所、そこでもって議論するんだということが出ていますよね。もともと私たちの教育自体が人の教育だと思うのですよね。私はそんな大して勉強していないし、さっきのスキルを見につけるだとか、あるいは情報を頭の中にかくさん蓄えるとかということだったら、学校はそれも一つの機能かもしれないけれども、私にとっては重要ではなかったと思いますよね。

やはり、学生時代、研究室にほぼ365日行っていたのです。なぜかという、そこで人と議論するのが愉快だったからですよ。その機能はどんなに時代が変わっても人間相手に行く限りは変わらない。もしかしたらそれAIがだんだんやるようになるかもしれないけれども、今のところは人には勝てないんじゃないでしょうか。

それから、「古くさい」私たちの思考ですけども、これは優秀な学生にとっては珍しいものでもあると思うのですよ、十分。スキルとかそういったものでどんどん高度なものを身につけるとか、知識量をたくさん増やすということとは全然違うことが教育の中にあるんじゃないかなと思ってね。私がかくさん勉強していないから特に思うのですけれども、やっぱり思いもよらないものの考え方がどんな人でもあるんじゃないですかね。それを提供できればいいんじゃないかなと思うのですけれども。

本城 僕もそう思いますね。人との議論だと

思うのだけれども、そういう場に今の学生たちを引っ張ってくるというか、そこがすごく難しいんだよね。

大谷 実は、本当に先生方のおかげで、あの4階のところがオープンになって、図書館長として嬉しかったのは、非常勤の先生方が質問やなんか受けるときにあそこでやってくれていることです。これよかったなと思って。非常勤講師室だとほかの人の迷惑になったりして困りますよね。それで、学生が生意気に「これだけがうちの優れた点ですから、地下鉄から上がって来れることとね」などと言っている。でも、そう言いながら使っていましたので、よかった。全く偶然に目撃したんですけれども、その先生は何回も来ていました。だから、みんながみんなじゃなくて、比較的若い大学院生なのかもしれないけれども、うちの学生を相手にしてあそこでいろいろなことを答えてくれているんだなって。

岡崎 アクティブラーニングの新しい部屋も含めて、あそこの利用率は高いね。

大谷 嬉しいですね。本当に人数は多いんですよ。図書館の通常の使用はちょっと危ないぐらいなんですけれどもね。

本城 どこかにそういう場所が求められていたのかなと思うのですね。

亀井 もともとがひどかったですよ。あの吹きさらしの寒い空間しかなくて、うちには特に必要でしたよね、それは。

大谷 ただ、今来ているのはやっぱり一部ですよ。大多数の人は、利用率は高くなったといっても全員が全員は享受していないですよ。一方、高度な、もう大学を離れて独自にやっている連中もいますよね。それを私たち

どういうふうにして配置したらよろしいのでしょうかね。

小島 今、お話聞いていたら、やっぱり「ひょっこりひょうたん島」ですよ。なぜ勉強するのかっていう。

大谷 そう、人間になるためってね。専門にいと、そっちの世話するばかりで。

本城 逆に、人文は法学とか物理とかってないから、取りとめのない学問なので、自分の担当した学生は、例えば経営の学生に何やっているんだと言われたときにどう言えるか、ということ基礎ゼミの中で戦略的に教えています。今役に立たないけれども、いずれ役に立つかもしれないようなことをやっているんだと、それも含めて。だから、本当に何をやっているの、学問ってなぜやるのということも、多分人文の基礎ゼミではやらないと、建築みたいに建築家になるんじゃないから、そういう意味で人文を選んできたというのは、わりと茫洋として偉いなと。

狭く固まらないで偉い。それを少し枠をつけてあげるようなことを、多分教養教育なり自分の学部教育でやればということ、コンピューターや iPhone のリテラシーはすごいけれども、なぜ勉強するのかとか、人と議論するのか、ということは人文ならある程度やれそうな気はしています。

大谷 ちょっと経済に来る学生たちも、そんなに経済理論を学ぼうと思ってくるわけじゃないですよ。

岡崎 すごいな。それ自然科学と相当違うね。

山田 やっぱり就職に有



利だから経済とか、は否めない。その流れで入ってきた学生に無理くり専門的なことを教えこもうとするなど、でもこれぐらいまでは理解してもらいたい、とか悩んでいます。世の中の教養を身につける、とかの目標設定もしないと。なかなか、そこはいろいろな議論があるんだけど。経済学教育学会なんかでも、要するに経済学って学んで何になるのという議論もあります。

本城 そのほうがいいんじゃないですかね。役に立たないということはいいことになって、逆に言えば。

岡崎 大体、専門科目を仮に4年間勉強しても、それでやれることはたかが知れてるわね。

大谷 まさにそうなんですよ、今、すべてが高度化しててね。

本城 それは学部のその人に言いたいよね。本当そうだと思う。

大谷 本当に、もう大学院行って勉強してね、ということで本当……。

本城 2年間教養取れたのに足して4年間やったって、たかが専門のスタートラインぐらいなんですよ。だから、大学院で本当の専門学ぶはずなので。ずっと教養に1年半ぐらいいればよかったのにねと思ったりしますけれどもね。

岡崎 本当に小島さんが言ったように、知識はどこからでも手に入るの、何を教えるか難しいね。ディスカッションを中心にするというのは一つのやり方だけれども、知識をどうつないでいくかということも、やっぱり大学で教えられると思う。

山田 つないでいく。

本城 それで、学生はデジタル情報はわかる

けれども、それを線でつなぐようなのっていうのは、確かに大学の役割かもしれない。

岡崎 ジグソーパズルのピース1個1個の模様は詳しく見えるかもしれないけれども、これが全体の中にどうはまっているのか、ということ、Webの検索だけではなかなかわからない。

大谷 私、すごく古くさいかもしれませんがけれども、輪読って大切だと思うんですよね。残念ながら人文の学生も、本が好きだなんだ言っているけれども、実際にはそんなに好きじゃなくて、要約サイトから引いて、それをコピーしてくるわけですよ。要するに、リーターズダイジェスト。うちの親の世代は、一家に必ず百科事典があったように、リーダーズダイジェストもみんな買うという時代だったんですけれども、あれはだめですよ、やっぱり。要約を見たって、元のものからはたくさん部分を落としていくからダイジェストができるわけで。実は、筋道が外れた、細かなところにいっぱい議論があったりする、それが面白くて読んでいくと思うのですよね。輪読の楽しさって、味わってみたいとわからない。もしかしたら分野によって味わっていない人があるかもしれないけれども、輪読って本当に楽しくて。

本城 同じ文学部だけれども、英文でも大学の授業よりも先輩や仲間との輪読っていう人が、あれはすごい刺激になったし面白かったですね。

大谷 こんな見方があるのかとかね。

本城 そうすると、大学教育要らなくなっちゃうよね。場が必要なんですね、やっぱり。学部の控え室とかそういうところでやってい

たのが。

大谷 それに、よく概説やなんかで語られている人物像って実は違うんですよ、有名な人物がとんでもない発言いっぱいしててね。それからもともとその人の生涯だってとんでもなくて、いっぱい女に手を出していたりとかね。

本城 じゃアラーニングコモンズみたいなところで輪読みたいなの、同級生でも先輩、後輩でもいいし。

大谷 あの非常勤の先生は、多分そういうことしているんだろうなと思って見ていましたよね。

本城 さっき小島先生がおっしゃったように、教養部教育というものの自体がもしくは大学教育自体を一步退いてみるということは、確かに重要ですよ。教養も変わってきているし、大学教育も変わってきている。

山田 なるほど、そうか。やっぱり教養部は過去の存在になっちゃうね。

本城 そういう結論なの。

大谷 教養は変わってもまだまだ。

岡崎 でも、もう大学教育自体が教養教育のようなもんなんだから、それに対しての発想というのは旧教養部の人たちはかなり持っていると思うよ。

山田 そうだね。

本城 でも、大学教育自体がもう教養教育みたいと言っちゃうのは、学部の人は一、ノって言うんだろうけれどもね。でも、実際にはそうだと思う。

小島 本当に。たかがという感じですよ。

岡崎 でも、文科省もそう言っているわけやからね。

大谷 そうなんですよ。

本城 文科省はすぐ変わるから。一時期は大学院教育重視でうちもつくったじゃないですか、ドクターとか。

【相手にわかってもらう姿勢】

山田 個人的にも教育熱心な人が教養出身の先生にも多い気がします、っていうか、目の前の学生のこと念頭に入れてやっているというのは感じました。教養担当にもいろんな先生いるけれどもね。もちろん経済にもいろんな人がいるのですが。問題意識というか、学生に対する姿勢の違いは、話していると感じます。

岡崎 やっぱり1年目の高校出たばかりの学生を相手にしているから、相手に楽しいと思ってもらいたいとか、わかってもらいたいという気持ちは強いわね。わからないほうが悪いんだなんて思わないよね。

本城 あと私は学部変わったので、大学は1校しか知らないけれども、学部二つ三つ違うじゃないですか。そうしたら意識とか感覚とか、例えば相対的になりますよね。自分の中で正しいというのが全然通用しないし、教養部のときも英語って英語部落と言われたらなんかちょっとね。何だか。

大谷 第2外国語かなんか、もう本当に。なんか当時の教養部の空気を目の敵にするようですけども、皆もう軽んじて軽んじて、我々を本当に。

本城 失礼でしたよね。

岡崎 教養のときそうだったの。

小島 そうなの。

大谷 そうでしたよ、いつもそういう扱いだ

なと思っていた。

本城 だから、周辺にいたから結構見えるところもなくはないし、学部でも、共通教育研究部、経済、そして人文だから、1カ所にずっといる人たちよりはちょっと見えているかな、という。

大谷 随分あるって。

岡崎 あと、教養部には、フィールドワークをやっている人が結構多かったので、フィールドに学生を連れていくと学生が生き生きするいう、そういう発想がありましたね。

例えば、自然科学実験室のことが、数年前に議論になってたでしょう。あれは一般の教室にしてしまうべきだという、そんな撤去論があった際、教養教育はもう座学でいいんだと、黒板だけでいいんだ、実験なんて要らないんだと強く言われたけれども、でも、実験をしないとわからない感動というのはあるんだわね。でも、それをいくら議論しても通じなかったよね。

本城 僕も見直しを言われ、なんとか確保されて。今後どうなるのかね、あそこね。

大谷 理科嫌いだったんですかね。一番楽しいのにね。

岡崎 黒板で書くだけでは伝わらないことはあると思うけれどもね。だから、実験できる部屋というのは貴重な部屋なんだわね。

本城 資料も置いてあるんでしょう。

岡崎 資料というか薬品類。危険でないものは置いてあります。

大谷 生物の標本とか。

岡崎 それもあります。だからほかの学部にも使ってほしいんだわね。実験でなくても一応テーブルがあるから、ゼミなんかには使

本学の教養教育を考える―教養部を振り返って― (小島康次, 本城誠二, 亀井伸照, 岡崎教男, 大谷通順, 山田誠治)

えるだろうし。

本城 そうか、工学部の1年生は少し使っていましたね。今ちょっとわからないけれども。生命が始まったとき。

岡崎 ほかの学部の人でも使っているだけでも、誰も知らないのか、希望がないという状況。

山田 それもなんかアクティブのやね。昔は理論家が頭がよくてフィールドは体力とか……。今は、それは間違いで、また広範な分野でそういう考えはなくなってきているけれどもね。昔はそういう理論至上的な考えがなんか典型だったけれどもね、

岡崎 それは、突き詰めると最終的には物理学帝国主義になるんだよね。物理以外の学問は学問ではないとかいう(笑)。あれよくないよ、本当に。

本城 でも、物理学の前に哲学じゃない。ヨーロッパのあれで。全部 Ph.D だもね。あ、物理学は違うか。

岡崎 いや Ph.D ですよ。

本城 Ph.D なの。じゃあ哲学博士、そこから始まっている。その前は神学ですからね。

岡崎 こういふ全学的な教育を考えたときの議論を、教養の人間、旧教養の人間だけじゃなくて専門の人も入って行かうのも面白いかもしれない。

亀井 こういふ話ね、ほかの先生方ともしてみたいですね。

本城 本当ですね。

大谷 ぜひ工学部の先生としてみたいもんです。へえーっていう感じになるかも。

岡崎 あと法学やね。

亀井 また、法学部は若い先生ふえていますもんね、わりと。

山田 今日は多岐にわたり有意義なお話、ありがとうございます。

(この対談は、平成30年1月17日に実施されました)



(上) 山田
(下) 小島

岡崎
亀井

大谷
本城